

小澤征爾 追悼

N響が演奏を拒否 自由人と権威機構、さまざまな要素絡む

クラシックニュース主宰／元梶本音楽事務所（KAJIMOTO）**藪田益資**

東京新聞の記事が発端

1962年秋、東京新聞の社会面に大スクープが掲載され、小澤征爾とNHK交響楽団のトラブルが始まった。最終的には、N響のメンバーが小澤征爾の指揮するコンサートの演奏を拒否する、という驚くような出来事が起きたのだ。この事が起った原因を考えてみると、さまざまな問題がそれぞれ微妙に複雑につながっていた。

私は1959年、当時大阪にあった梶本音楽事務所（現KAJIMOTO）に就職。働き始めて3年目、東京オフィス開設のため上京を命じられ、「62年3月に上京、5月に東京事務所を開設。東京進出の意図には、小澤征爾との所属契約が近い事もあった。

その年の11月、梶本音楽事務所が初めて招聘したチェロの巨匠、ガスパール・カサド（夫人はピアニスト原智恵子）と、指揮者小澤征爾がN響定期演奏会で共演した。聴衆も大満足のとても素晴らしい演奏会であった。

その演奏が聴衆の多くに感銘を与えたが、楽屋付近には東京新聞の横溝亮一記者が取材で現れ、なんとなくおかしな雰囲気があった。数日後、東京新聞社会面のトップに「小澤征爾をN響のメンバーが拒否」という記事が出て、「小澤とN響」の事件の発端となる。

当時N響といえば、通常の定期公演や特別公演が、新聞や音楽情報誌の批評の対象となっていた。1962年、メシャンが来日。彼のトゥーランガリラ交響曲の日本初演が小澤の指揮、N響の演奏で開催され、この批評が新聞や雑誌の音楽関連記事で大きく取り上げられた。「トゥーランガリラ交響曲は小澤征爾の指揮だから成功した」と、小澤に対する最大級の賛辞だった。日本人指揮者によるこれまでの記事とは大きな違いが見られた。小澤がN響と演奏を始めてから、いろいろな問題を起こす。練習場への遅刻だとか、練習場へ知人を入れたとか、東南アジアツアー時にあった振り間違いなど、ほかにもさまざまなトラブルがあり、これらもあわさって、小澤に対する演奏拒否につながる大きな動機になった、と思われる。

年功序列の楽団員

1962～64年頃のN響は、東京フィル、東京交響楽団など他のオーケストラでもそうだが、当時のオーケストラ

の体質として、軍隊の組織のような雰囲気があった。中でもN響はもっともすごかったような気がする。一例を挙げると、NHKのスタジオでの練習時、弦楽器首席の人物が立ち上がり、管楽器の首席（若手）に向かって「おい、○○、お前はこの○○○のコンサートで俺たちのN響に恥をかかせたな・・・」と話し始めた。名前は呼び捨て、話も一方的だった。全楽員の前で示した話にしてはものすごい社会があるのか、と驚いたことがある。たんなる弦の首席から管の首席への会話だ。それが、団の年功序列に従って行われているようで、まるで軍隊の再現に驚いた印象が強く残っている。そんな雰囲気のオーケストラだった。

小澤征爾の音楽を聞く会

予定されていた東京文化会館での「第九」のコンサートをN響のメンバーに拒否され、コンサートがキャンセルとなった当日、私の出先に日生劇場から電話があり、「小澤が契約にもとづき燕尾服を持参して東京文化会館に向かった。すぐに東京文化会館に急行せよ」と連絡が入る。東京文化会館に向かうと、すでに大勢の新聞記者とカメラマンがホールの前に集まっていた。

文化会館は「N響に貸しているが、指揮の小澤には貸していない」と、会場に入れることを拒否していた。そのうち会場前の報道陣がますます多数になってくる。文化会館と何度も交渉し、すこし折れて「会場に入ってもよいが、ホール内は保守点検で必要な照明以外は点灯しない」と何とか話し合いが成立した。その時の写真が「燕尾服を着て指揮棒を持っている小澤征爾」で、新聞社が写したものとみられる。

その後、1963年1月15日に日比谷公会堂の空き日を使って、日本フィルの演奏による「小澤征爾の音楽を聞く会」が開催された。このコンサートは成功したが、小澤征爾は「自分の仕事の場として日本を考えないことにする」という気持ちを強く持ったようだ。日比谷公会堂の出来事は大きな意味を持った、といえよう。

1963年10月日生劇場がオープンする。日生劇場開館前、すでに小澤征爾は音楽担当プロデューサーの肩書を持っていた。たしか石原慎太郎が演劇担当のプロデューサーだった。日生劇場は銀座8丁目の第2千成ビルに準備事務所を持ち、作業していた。担当者として森千二があ



たっていた。N響とのトラブルが生じた時には、日生劇場はうまく体をかわしながら梶本音楽事務所を表に立てた。

第九のコンサートの日に、燕尾服を持って小澤征爾を東京文化会館に向かわせたり、文化会館に新聞記者を集め連絡などは、すべて日生劇場の作業で進行している。「小澤征爾の音楽を聴く会」のプレーンは日生劇場のアレンジで行われ、青柳正美、秋山邦晴、浅利慶太、安倍寧、有坂愛彦、一柳慧、石原慎太郎、井上靖、大江健三郎、梶山季之、曾野綾子、高橋義孝、武満徹、谷川俊太郎、團伊玖磨、中島健蔵、黛敏郎、三島由紀夫、村野藤吾、山本健吉、由起しげ子が、「小澤征爾の音楽を聴く会」を結成する。推測だが、浅利慶太は「劇団四季」の代表として活動していたが、当時のNHKの力は非常に大きかった。そのあたりの抵抗の姿勢を感じる会話は交わされていた。森は同会の事務局長になる。

余談だが、「小澤征爾の音楽を聴く会」実施時に、ポスターを街に貼ったことで私は築地署の取り調べを受けた。その後、簡易裁判所だったか家庭裁判所だったかから呼び出され、霞が関の法廷で拙論で許されたことがあった。その時、浅利慶太が手を回すべきところに連絡してくれていた。「心配しないで行ってください、問題ないようにしておいた」と言われた事が忘れられない。浅利慶太の細かい気配りを感じたのだ。

この件で毎日、記者会見を開催した。会見は、帝国ホテル旧館中2階に空いたスペースがあって、そこを使用することが可能だった。現在、明治村にその場所が移築されて、今でもその場所を見る事ができる。毎日午後3時過ぎにそこで記者会見を開き、「今日N響と○○はこのようなことがあった」などと、ほとんど私が一人で対応していたように思う。梶本音楽事務所は1962年5月1日に東京事務所を開設したが、このようなことがあって、記者団に対してまたたく間に存在が知れ渡った。また広報のやり方を日生劇場の準備室の面々に教わった。日生劇場の準備室のプレーンにいた俳優座の町田裕、二期会事務局長の河内正三の存在が大きかった。私にとって大きな先生2人から、いろいろ教えられたように思う。きびしい出来事が次々と起こったが、梶本音楽事務所の東京進出にとっては、忘れない事件によって短時間で東京での存在を認識してもらうことができた、という面もあった。

たまたま NHK に出演

N響はNHKから出演要請を受け、たんに出演者となっ

ただけで、小澤征爾に対する何の責任もない。NHKは音楽部の細野達也ディレクターが、個人的に成城学園の先輩・後輩の関係で、たまたま出会ったときに「指揮してみないか」「やってみましょう」という口約束で決まった話である。契約書はない。他の職員も「細野の仕事だ」と、触れないように避けていたようだ。細野達也がNHKの理事になったときに、理事室で聞いた話である。細野達也は小澤の仕事をまとめた時、洋楽部のオーケストラ担当のチーフプロデューサーだった。

いま時間がたって、小澤征爾とN響の紛争を考えると、さまざまな要素が複雑にからみあっていったように思われる。自由人の小澤征爾、軍隊を思わせるN響の人たち。NHKの権威機構。当時N響の事務長だった有馬大五郎と小澤の師である斎藤秀雄は、音楽教育者として国立音大と桐朋学園に対する問題がからむ。N響改組前の新響時代は団員だった斎藤の演奏家としての立場、有馬はオーケストラ経営者としての立場もある。1970年代になると、桐朋で学んで国際的に活躍する人材が出てくる時代になった。小澤征爾、東京カルテット、潮田益子、今井信子、久保陽子、堤剛、平井丈一郎、野島稔、前橋汀子など。演奏会の大半役割を占めるようになった。これらのさまざまな要素が微妙に絡みあっているように思われる。

新しい勢力が台頭

コンサートのステージの様子も考えてみよう。その当時、新芸術家協会の一強の時代だった。代表の西岡芳和の夫人が、民謡の大家で研究者でもあった町田佳声の娘であったことから、NHKからとくに引き立てがあった、と言われていた。その新芸について書かれた名著「新芸とその時代」(野宮珠理著)は、1970~80年代のコンサートについて書かれた名著である。一読をお勧めする。京都の人文書院の発行。一強の新芸術家協会は、昭和の音楽マーケットを支配するような勢力だった。労音の台頭が主催者の大半を占める時代になって、労音のコンサートの大半が新芸術家協会に占められていた。外来招聘のアーティストをはじめ、中村絃子、海野義雄、江藤俊哉、大橋國一、園田高弘といった人たちが所属していた。海野義雄がN響のコンサートマスターとしてNHKの音楽番組にしばしば登場していた。労音の持つステージの王者の地位も、新しい勢力の台頭に注目するようになる。これらの事柄が微妙に働きながら、小澤征爾とN響のトラブルをとらえるべきであろう。



小澤征爾 追悼



エネルギーッシュに演奏旅行 晩年は病再発でつらい日々

東京アーティスト代表取締役／元梶本音楽事務所 中根俊士

「小澤征爾さん逝去」ついに新聞にこの見出しが載ってしまった。2024年2月6日に亡くなったと書いてあった。

近年、小澤さんの画像がテレビに出ると、なぜこんな姿を人前にさらすのかと疑問に思っていた。こんなことはマネージャーがコントロールしファンに見せるべきではないと感じていた。私が知っていた彼の37歳くらいの溌剌とした容姿は忘れられない。多くのオールドファンはその姿が心に残っているのではないかと想像する。それはかっこいい姿で、誰もが憧れ指揮者を目指すようになるのも納得できた。晩年は病気との戦いだったよう思う。

1972年から担当

小澤さんに初めて会ったのは、梶本音楽事務所に入った翌年の1972年だった。日本フィルの演奏ボイコットがありオーケストラが分裂したころで、マネージャーが必要ということで梶本は小澤さんと契約した。N響ボイコットのころに契約するはずだったのが、この問題で梶本に迷惑がかかるといけないということで延期になっていた。当時の梶本は社員も少なく、日本人アーティストを担当する人間は先輩が一人と私だけで、必然的に一番仕事が少なかった私に担当が回ってきた。

あのころ、小澤さんは仕事の拠点がアメリカだったので、年に3回くらいの帰国時は、朝から晩までという感じで他の仕事はできないくらい忙しかった。それでも日常の仕事は新日本フィルの担当者支倉さんがほとんどやってくださっていたので、彼に比べればまだ余裕があったと思う。

当時の仕事で一番忙しかったのは、演奏の依頼が多かつただけでなく、ものすごい数のインタビューの依頼がきたことであった。それを「時間もない」と断るのだが、当時の梶本社長に「中根君、また頼んでくれるように断れ」といわれ、はじめ戸惑ったが慣れてくると別にどうということなくなってしまった。それと、いま70歳近い指揮者の何人かは、小澤さんに指揮を見てもらいたいがために、会場

練習が終わったころに彼のところに来て、マネージャーの目を盗み演奏会までの間にピアノを出し、レッスンをしてもらっていた。小澤さんは人が良いので、若い人たちのために疲れていても見てやっていた。

日本にいる限られた時間に演奏会やテレビの録画が続き、帰宅は真夜中になることが多かった。そんな生活が1~2週間続くのだからたまたまではないが、当時は若かったのでなんでもなく仕事をしていた。それ以上に、小澤さんの方がもっと大変だったと思う。

冷えたビール150本買い集める

小澤さんは生気に溢れエネルギーッシュな人だった。それでも何日も演奏会が続くと肉体的にも精神的にも疲れが溜まり、はたから見ても大変そうだった。演奏会は東京だけではなく、その間に地方公演やテレビの収録などもあり、本当に休む間もなかった。当時は東京に自宅はなくホテル住まいだったので、それも大変だった。演奏旅行にかける時など、ホテルに迎えに行ってもなんの準備もなく、今まで生活していたまんまの部屋で、旅行の支度から始めなくてはならなかった。そういう大変なことは、ほとんど支倉さんがやってくれていた。そんなギリギリの時間で綱渡りの連続だったが、そのために電車や飛行機に乗り遅れたということはほとんどなかった、と思う。

一度中国地方の演奏旅行について行ったが、倉敷での終演後に、「旅行が長く続いたので、舞台で楽員さんと乾杯したいから、缶ビールを100本くらいとソフトドリンク、おつまみを用意して欲しい」と言われ、当時はコンビニもない支倉さんと酒屋を何軒も回って、冷えたビールを買い集めた。翌日の広島公演では、「昨日はビールが足らなかつたし、今日は夜行で帰京する楽員さんもいるので、150本くらい用意してくれ」とと言われ、広島に着くやいなや市内の酒屋を駆けめぐり回った記憶がある。今の人々に言っても想像もできないと思うが、当時、冷えたビールを



買うということは大変な時代で、ましてや 100 から 150 本ともなれば、とんでもない苦労がいった時代だった。

余談だが、倉敷公演の後小澤さん達と夕食を取りに店に入ったら、その店に楽員さんが 15 人ほど先に入っていた。こういった場合、小澤さんは「すぐ帰りますから」と言い、店の片隅に座り飲食後、短時間で切り上げ、帰る時には、楽員さん達のそれまでの飲食代を全て払って帰るのが常だった。

サンフランシスコ響を招聘

1974 年 6 月に梶本は小澤指揮でサンフランシスコ交響楽団を招聘した。もちろんオーケストラを招聘するのは初めての経験で、考えも及ばないことがたくさんあった。例えば新幹線移動は楽員全員グリーン車での移動。楽員以外に家族も来ている人がいたので総勢 130 人くらいの大移動だった。当時の新幹線はグリーン車が 2 両しかついていないので、全員を同じ電車のグリーン車に乗せることは不可能で、取れない分は普通車に乗ってもらい、楽員間でローテーションをしてグリーン車と普通車を回していた。

一番驚いたことは、駅までの移動用にバスを 4 台手配しているのだが、ホテルを 8 時に出るとすると、満員になったバスから時間前でも出発させてしまい、最後の 1 台を 8 時 1 分まで待ち、乗り遅れた者は勝手に自分で来いということ。日本では点呼をとり「誰が来てない」ということで、探したり待ったりするのが通例だが、そんな小学生相手のようなことはしなく、大人として自分の責任で行動するようになっていた。また、真夜中にバゲージコレクションをするのだが、夜中まで飲み歩いていた楽員は間に合わず、翌日重いバッグを自分で持ってくる羽目になっていた。そんな事態が起きた時事務局員は誰一人として手伝わず、「今晩から彼は一番早く荷物を出すよ」と言って冷ややかに眺めていた。

それと楽器に関して、大きさを測る単位が「キュービックフィート」という単位で、これは縦横の大きさだけでなく体積も関係する単位だった。羽田から福岡空港に移動し、いざ楽器をトラックに載せ替えるときになり、体積、容積が必要だということが、その時にわかった。運送屋さんは「トラック 3 台で足りる」と言って見積もっていたがそれでは載りきらず、もう一台トラックを出すはめになってしまった。国内線ジャンボ機に乗ると、当時は安全のための説明映像はなかったので、スチュワーデスが実際に前方に

立ち演技するのだが、それが終わると、「団員が拍手で盛り上がるから、面白いよ」と小澤さんが言っていたが、その通りに。まあ、日本人と違ってどこでも楽しむという気質があるのだろう。

しかし、公演に対してはいつも真摯に演奏し、自分たちも楽しみながら、お客様に対するサービス精神も持ち合わせていた。日本のオーケストラでは楽員は仮面をして演奏しているが、そういったところは微塵も感じさせないということは、学ぶべきところだった。

公演は全部で 10ヶ所、博多、小倉、広島、神戸、京都、大阪、東京(2)、長野、藤沢、札幌だった。札幌公演の後、翌日羽田経由で帰国した。公演は大過なく無事終了することができ、どの公演も好評で全て売り切れになっていた。公演を決める時から小澤人気で、スケジュールはあっという間に切れ、苦労をしなかったのではないかと思う。梶本音楽事務所は初めての海外オーケストラ招聘に大成功を収めた。

余談だが、現 KAJIMOTO 社長の眞秀さんが、通訳としてアルバイトで全行程同行し、私は彼のことを「マサ、マサ」と呼び捨てにし、彼は私のことを以来「先輩」と呼んでいる。少し怖い顔をしているが心根の優しい人柄で、大いに働いてくれたことも良い思い出だ。

小澤さんに 1974 年 6 月にご長男が生まれた。9 月の帰国時だったと思うが、羽田に迎えに行ったら、小さな箱を小脇に抱えて登場し、「ご長男誕生おめでとうございます」と言うと、その箱からパナマ産の葉巻を出しみんなにプレゼントしてくれた。アメリカでは男子誕生に対して葉巻を配る習慣があるといっていた。

アメリカ・欧州ツアーに同行

1974 年 10 月から一ヶ月半にわたり、新日本フィルのアメリカ・ヨーロッパ旅行の際に、小澤さんが私に「この世界で仕事をするのなら、外国を見ておいた方が良い」といつて、オーケストラに話し、私は同行することになった。当時 1 ドル 360 円だった時代に一人メンバーが増えることは、財政的に大きな負担になり、「お前が来るから 100 万円余計にかかるてしまう」といわれた。アメリカは 7 ~ 8 回公演だったと思うが、一回は国連会議場での桐朋学園オーケストラとの共演があった。これは当時としては名誉なことだったと思う。その後、確かにパリに飛び、ヨーロッパ公演が始まった。この旅行には秋山和慶氏がもう一人の

指揮者として、主に後半のヨーロッパ公演を指揮した。ソリストには野島稔、堤剛、今井信子が同行し、演奏会数は全部で22回にもなった。小澤さんはミュンヘンでは「ヒットラーが演説した」という有名なビアホールに私達をつれて行き、「ここで演説したのだ」と教えてくれた。パリでは終演後、シャンゼリゼ劇場の近くのフレンチレストランに全メンバーを招待し、メンバーに感謝を表し、その後の公演の成功を祈ってくれた。

当時、小澤さんはまだヨーロッパにあまり行ってなかつたか、小さな町も多かったので、ホテルに着くと必ずフロントで会場への道のり、時間がどのくらいかかるかのチェックをするように言われた。その甲斐あってか一度も遅れることはなかった。

小澤さん最後の公演はドイツのマールブルクだった。この町には彼のお兄さんの俊夫さんが住んでいたことがあり、その縁で地元合唱団とブラームスの「運命の歌」の共演が実現した。翌日フランクフルトからの帰途、空港が霧で使用できなくなり、出発が大幅に遅れた。彼はスケジュールが詰まっていたので、ゆっくり酒でも飲んで待とうと悠然と構えていたが、堤さんは予定の飛行機で日本に

帰国しないと次の仕事に間に合わないということで、大きな荷物と楽器を抱えて空港中を走り回り、飛んでくれる飛行機を探し回っているのを、小澤さんは「大変だね」と言いながら涼しげな顔で見ていた。

1975年以降は、毎年同じような時期に帰国し、過労でキャンセルするようなこともあったが、それでも大過なく過ごしていたと思う。

私は1977年1月に樋本を退社した。以来、小澤さんとは演奏会などでたまにお目にかかるだけだったが、晩年は病に苦しみ、その再発などで辛い日々を送られているのをニュースなどで見て心傷めるしかなく、そして2月の訃報を。

いつまでも万年青年のような姿しか浮かんでこないが、それが一世を風靡したスターというものではないだろうか。



写真は右から、新日フィル支倉二二男、小澤征爾、中根佐多子、中根俊士、
新日フィルステージマネージャ宮崎隆男 1980年ころ

小澤征爾 追悼

オペラの経験もっとさせたかった 世界一の大指揮者になれたのでは

こぶしくらぶ主宰／元民音 江藤昌子

私は財団法人民主音楽協会（現一般財団法人民主音楽協会／通称「民音」）の企画部門で30余年勤務して参りました。小澤さんとも多くの仕事を一緒にしましたが、小澤さんがまだアメリカに行く前、第九の指揮をお願いしたのが初めだったのではないかと思っていますが、記憶は定かではありません。もう50年以上前の事です。

バーンスタインが才能見抜く

小澤さんはアメリカに行ってニューヨークのコロンビア・アーティストという音楽事務所に入るわけですが、その事務所の社長であるウィルフォードさんに小澤さんを紹介したのがバーンスタインだと思います。バーンスタインは小澤さんの稀有な才能と、けっしてよくない日本の環境を、いち早く見抜いたのではないでしょうか。彼は「カラヤンの弟子」ということになっていますが、一番の師匠で若い頃の小澤さんを導いたのはバーンスタインでしょう。バーンスタインのおかげでアメリカで大きな地位につくことができたのではないでしょうか。

そのコロンビア・アーティスト社長のウィルフォードとは、私はとてもウマが合ったのです。たいして英語がしゃべれた訳ではないのですが、彼が来日するたびに毎回毎回ホテルで食事を一緒にしていて、それは彼が亡くなるまで続きました。奥さんはルーズベルト大統領の孫で、それはとても品位のある方でした。

私がニューヨークへ行った時には、カーネギーホールの前にあるコロンビア・アーティストの自社ビルの前まで行ったのですが、あまりきれいな格好をしていなかったこともあり、拳銃をもった体の大きい警備のお兄ちゃんが出て来て、中に入れられなかつたのです。そこで「ウィルフォード！ ウィルフォード !!」と言っていたら余計怪しまれてしまったのか、取り押さえられて捕まりそうになってしまったのです。それでも「ウィルフォード !! 江藤 ! エトーッ !!」と叫んだら、彼がビルから駆け下りて来てくれました。そうしたら、私を抑えていたお兄ちゃんもやめてくれて中に入る事ができました。今から考えれば、アポなしで行ったのによく入れましたよね。たまたま事務所にい

てくれたから良かったですが、出て来てくれなかつたら捕まるか拳銃で撃たれていたかもしれない、なんて思ってしまいますよ（笑）。そのくらいの関係ではありました。

指揮者コンクール審査員を依頼

話がそれましたが、小澤さんとは第九の他にも、指揮者コンクールの審査員をずっとお願いするなど、何度も仕事をするようになりました。その中でも本当に大変だったのはオペラ制作でした。

当時主催したオペラは「みんおんオペラ」と名付けられ好評を得ておりました。中でもとくに想い出深いのは、小澤さん指揮で行ったオッフェンバック『ホフマン物語』と、チャイコフスキー『スペードの女王』の2作品です。あまり公演されない演目もあり、いろいろありましたが、忘れられない公演となりましたし、感慨深い公演でもありました。

もともとは『世界オペラシリーズ』として、ウィーン国立歌劇場やスカラ座を呼んで大規模な公演を開催していましたが、あるときオペラのパーティで日本人の歌手から、「民音さんはオペラをたくさん呼んでいてすごいけれど、なんで日本の演奏家に目もくれないのですか？」と言われたのです。「そう言われればそうだな」と思いました。声楽コンクールや指揮者コンクールを行っていたって、それだけでアフターケアは第九くらいで行っていない。だったら、「総合芸術のオペラを民音で制作しよう」ということでやり始めました。

『ホフマン物語』たのまれる

何作かオペラを制作し、「みんおんオペラ」として定着していたそのころ、小澤さんに『ホフマン物語』をやってもらえないか、と頼まれました。当時、小澤さんには指揮者コンクールの審査員を何度もやってもらっていた事もあり、すでに単なる仕事上だけの付き合いではなくなっていました。小澤さんがいくつかの懸念を抱えたときに、なぜか私に相談をしたことありました。小澤さんの成城の家にも何度か伺いました。話を聞いて問題解決のお手伝いを



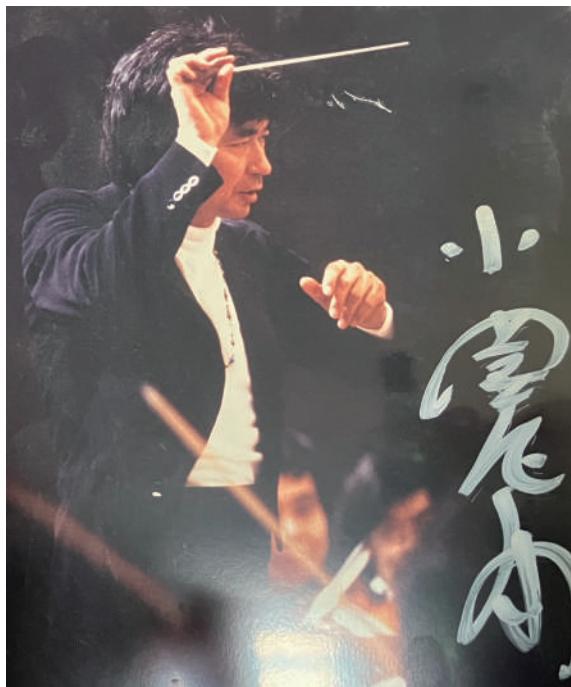
したことわざったように思います。もちろん、私がオペラの制作もしていたので私に頼んできたのだと思います。

ただ、オペラは最低数か月前から、いや、もっと前から準備を始め、指揮者も稽古や、合わせなど大変時間がかかるのですが、ちょっと長めに小澤さんが日本にいる、となると、マネジメントが勝手にオケのスケジュールを入れてしまうのです。そうするとゆっくりオペラの勉強や準備なんてできない。小澤さん自身はオペラのあらゆる経験や勉強をしたかったと思うのです。ですから私に相談した、という事もあると思います。それで東京で『ホフマン物語』をやることとなりました。もちろん小澤さんのためだけに開催する訳では無く、こちらにとっても小澤さんならチケットも売れるし「願ったりかなったり」という事もありました。

『スペードの女王』は電車内で打合せ

その後チャイコフスキーの『スペードの女王』も小澤さんで開催しました。この時には、やっぱり合間でオケの仕事を入れられてしまい、小澤さんは忙しくなって時間がなくなってしまいました。ですからオペラの打合せをするためだけに、小澤さんが地方に移動するローカル電車の中で、演出家の栗国さんと共に打合せをしました。そこしか時間がなかったのです。それではやはりオペラを振るのは厳しくなってくると思います。もう少しきちんと時間を取ってオペラは振るべきなんです。結局、民音での小澤さん指揮のオペラの開催は、『ホフマン物語』と『スペードの女王』の2本だけとなっていました。

民音で指揮を振ったオペラの公演を、小澤さんが海外での指揮の為の「試演公演」などと言う人もいましたが、でも私は「それでもいいじゃないか！」と思ったんです。やっぱり小澤さんは日本を代表する指揮者だし、世界一の才能だと思うのです。それなのにオペラをわかっていないまま海外で振っていたら成功は厳しくなる。ちゃんと勉強してから海外で振って欲しい、と思っていました。小澤さんがスカラを振った時に、一幕が終わったあと二幕を見ずにかなりの人が帰ってしまったことがあったそうです。その時はやっぱり小澤さんのオペラへの理解度が足りず、イタリアのオペラファンには受け入れられなかつたからだと思うのです。「世界の小澤」と言われる指揮者がそんなことはいけないと思いました。ただそれも、日本にオペラ劇場が無かったからだと思うのです。今は新国立劇場ができましたが、ごく最近です。



江戸京子さんのプロデュース手伝う

話が少し逸れますが、小澤さんの始めの奥様の江戸京子さん、といえば今でも忘れられない大変な思い出の公演があります。

江戸さん自身がプロデューサーとなり、ロシアからオーケストラを呼んでコンサートを行う予定があったのですが、制作をする人がいないということで、私の上司の方に相談が行つたらしいのです。そこで「江戸さんから名指しで頼まれたから江藤手伝ってこい」なんて言われたので手伝うことにしたのです。ですが、江戸さんが自分でロシアに行って打合せしているから、やることが抜け落ちま

くっているのです。「そんなお嬢さん稼業でやっていたら、いい目に合いますよ！」と注意したのですが「お嬢さん稼業なんて言わないで！」と普段あまり怒らないのに怒ったのです。その時は自分でできると思っていたのでしょうか。

来日の当日になり、横浜に船で団員も荷物もみな到着する予定だったので迎えに行きました。そこで待っていると団員がみな船から降りてきたのですが、荷物らしきものは見当たらない。聞いてみると「船には我々しか乗っていない」と言うのです。手続きしようと思い税関に行っても「船底は空です、何もありません」と言われてしまいました。

要するに、楽器も衣装も楽譜も、人以外は何もなかったのです。これはさすがに江戸さんも真っ青になり「皇太子殿下（現在の陛下）も呼んでいるのに、どうしよう、どうしよう」と言うばかりで、皆本当に困ってしまいました。来日してからその一週間後が本番だったのです。そこから皆寝ずに作業をし、日本のオーケストラから楽器と楽譜を借りて、金管楽器は楽器店から借りる手はずをつけました。ただ衣装を探すのが一番大変でした。

当時、海外の方が履けるような大きな靴は日本になかなかなく、新宿にある靴屋さんを全部あたり、民音のロビーに呼び寄せて 100 人以上分の足に合わせて全て用意しました。靴屋はここぞとばかりに高い靴ばかり勧めてきましたが、しょうがないですね。男性の衣装は、団員が泊まっていたホテルの結婚式の貸衣装を全部集めてもらったのですが数が足りず、そのホテルが他のホテルにもお願いしてくださり、形はバラバラだったのですが何とか数を揃えてもらいました。女性の衣装は、オペラで付き合いのあった東京衣装に「黒い衣装を全部持ってきて」とお願いして持ってきてもらいました。人数が多かった事もあり、当時のお金で数百万円くらい掛かりました。

大物の江戸社長が裏方

ただその費用は、なんと江戸京子さんのお父様の江戸英雄さんが全て出してくれたのです。メンバーにも「この靴は全て皆さんにあげます」と言って。団員は大喜びですね。江戸英雄さんは三井不動産を発展させた、まさに大物の社長ですよ。そんな方が「娘が本当にご迷惑をおかけしまして、申しわけございません」と言いながら、私に対して深々と頭をさげるのです。私は「仕事としてお付き合いしているだけで、社長にご挨拶していただいたり、まして

や頭を下げるなんて事をしていただくような事はしていないですから」と申し上げたら、「にこっ」とほほえんでくださいました。本当にできた方なのだなあ、と、私はこういう方を尊敬しようと思いました。

お蔭さまでこの公演の様子は、「苦労の下に公演を開催」と朝日新聞の 1 面に掲載されました。結果的にはそれで公演を知られることになりましたので、江戸京子さんには「また次回もお願ひ」と言われましたが、こんな大変な事があった後ではさすがに断りました。本当に彼女には苦労させられましたが、それをきっかけに親しくなりました。ただその後彼女は、「東京の夏」としてコンサートをシリーズ化し、成功を収めました。

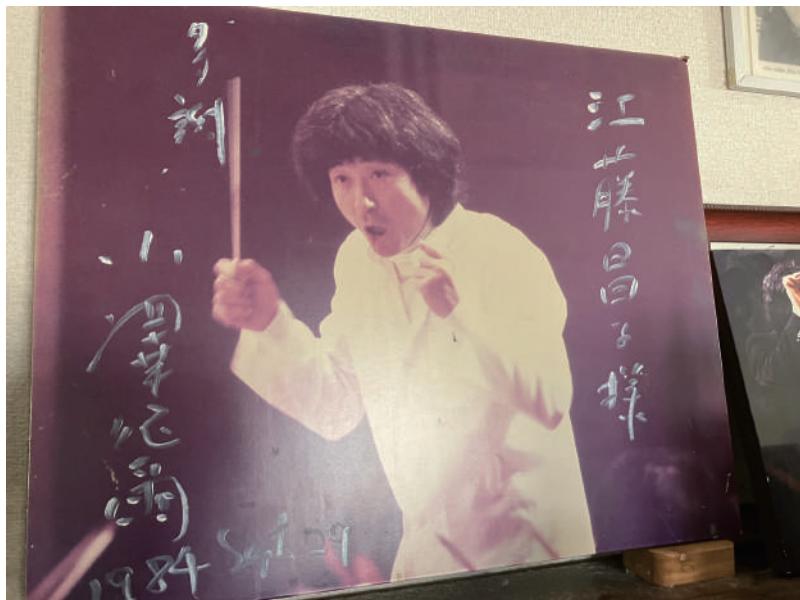
これは、江戸京子さん本人から聞いた話ですが、江戸京子さんがヨーロッパから帰ってきたら日本の週刊誌に自分の記事が出ていたそうです。それを見て「週刊誌を見たら、私離婚したことになっているのよ！」と、自分が離婚したことを見たと知った、と言っていました。今では考えられないですが、当時はそんなことができたのですかね、どうやったのかわかりませんが（笑）。小澤さんも、「江戸京子さんなら許してくれる」と思ったでしょうね。今の奥様は美しく優しく、寡黙ではありますが、聰明な方です。私自身、何度もお世話をになりましたし、お嬢さんの征良さんにもいまだにお世話になったままになっています。

才能は世界一 イタリアでは振れず

小澤さんは、評論家や日本のテレビでは「世界的指揮者の」なんて枕詞が付けられていますが、本当に才能の固まりではありました。私がからすれば「世界的指揮者」とまでは言えなかったと思います。アメリカ、パリ、それにドイツとウィーンくらいですよね、活躍したのは。とくにイタリアではほとんど振れなかった。一口に言えば不運だったのかもしれません、それは周りの人々や環境にそこまで恵まれなかったのだと思います。アメリカではバーンスタインに認められて、彼の所属事務所（コロンビア・アーティスト）の社長でマネージャーであったウイルフオードを紹介されただけは、当たりだったのだと思いますが、とくに日本では国といい、オーケストラといい、マネジメントといい、恵まれなかったのだと思います。それは遅れていた日本の環境のせいだとは思います。もし日本に古く

からオペラ劇場があって、多くの歌手や指揮者が出演でき、海外の音楽を勉強できる環境が整っていれば、そして小澤さんがオペラの経験ももっとしっかりできていれば、もっともっと大きな成果を残した、名実共に世界で活躍する、世界一の大指揮者になっていたでしょうね。ご本人もそれがわかっていたのか、ここ数年は若い演奏家の為にオペラ塾を開催していましたよね。有名なオペラ歌手や演奏家も呼んで。そのようなものを私ももっともっとエスコートしたかったです。だって小澤さんのひと振りで本当にオーケストラの音が変わるんですから。そんな小澤さんの才能をより伸ばし活かしたかった。

最後に。小澤さんの振るすべてのコンサートで感動してきましたが、中でもマーラーの『復活』は最高で震えるような感銘を受けました。もうあの勇姿と感慨深い演奏を体験できないと思うと本当に残念です。（談／丸田朗記）



江藤宅のリビングに飾ってある、小澤征爾のサイン入りのパネル
1984年9月29日の日付がある



小澤征爾 追悼

公演や記者会見で邂逅 ～私の日記から～

(NPO 法人「音」を「楽」しむ ONGAKU の会／元民音) 口中常嘉

小澤征爾指揮 桐朋学園オーケストラ大阪公演

1973 年 12 月 14 日 大阪のフェスティバルホールで、小澤征爾指揮・桐朋学園オーケストラのコンサートが開催される予定だった。ところが定時の午後 7 時になっても始まる気配はない。この日、関西地方は折からの大雪に見舞われ、東京からメンバーを乗せた新幹線は関ヶ原付近で立ち往生。徐行運転はするものなかなか前に進みません。前日、広島のレッスンから前乗りされた齋藤秀雄先生お一人が舞台袖でやきもきされていた。

開演予定 1 時間後の午後 8 時、共同主催の梶本音楽事務所熊本さんと、民音の私が舞台に出てお詫びと事情を説明する。「まもなく到着するので、もうしばらくお待ちいただきたいた」と。さいわいほとんどの方にお待ちいただいた。

ようやく午後 8 時 45 分開始。舞台衣装は新幹線の中で着替えてきたとのこと。時間が遅いので 1 曲目のモーツアルト「リンツ」はカットし、ラヴェル「ダフニスとクロエ」第 2 組曲と、R. シュトラウスの交響詩「ドン・キホーテ」(ヴィオラ独奏: 安永徹、チェロ独奏: 堤剛) が演奏された。午後 10 時半に終演。

終演後、梶本音楽事務所の梶本社長が食事を開いてくれた。齋藤秀雄先生、小澤さんとお母様のさくらさん、チェロの堤さん夫妻、私たち夫婦(妻も当日の受付担当)が招待された。夜中、枚方までタクシーで帰った。

6人の大指揮者が勢揃いした記者会見

1984 年 7 月 翌年の民音指揮者コンクール(現東京国際指揮者コンクール)の大綱発表記者会見のときのこと。翌年のコンクールからヨーロッパで予備選を始めることになり、記者会見を開いた。出席者は朝比奈隆先生(審査委員長)、山田一雄先生、森正先生、岩城宏之さん、小澤征爾さん、若杉弘さんと 6 人の大指揮者が勢揃いした、まさに空前絶後の記者会見となった。この 1 時間後、同じホテルニューオータニの会場で、小澤征爾さん指揮のオペラ「ホフマン物語」の記者会見を開催。こちらの担当は、

江藤昌子さんでした。後日、日比谷の外国特派員記者クラブでも、朝比奈隆先生、森正先生に出席していただいて記者会見を開いた。

「齋藤秀雄 音楽と生涯」を出版

齋藤秀雄先生には指揮者コンクールと、その後、室内楽コンクールでも大変お世話になった。指揮者コンクールでは第 1 位入賞者に特別賞「齋藤秀雄賞」が贈呈された。齋藤先生は、「指揮法教程」を編集されたり、後にチェロ演奏の講義録があるが、あるとき、齋藤先生のことを書いた本が無いことに気づき、本来ならば桐朋学園が出版するのが自然ではあるのしようが、諸般の事情でそれが叶わないのであれば、様々お世話になっている民音が出版しても良いのではないか、と社内で稟議をあげ決裁がおり、編集に取り組むためのプロジェクトチームを作った。

小澤征爾さんには特別インタビューをお願いすることになり、1984 年 12 月 30 日 成城のご自宅に伺った。はじめに「齋藤先生がいなかったら、私も秋山(和慶)も、多分、岩城(宏之)さんも、若杉(弘)さんもいなかっただろう」と言われました。その言葉を「これだ!」と思い本の帯のキャッチコピーに使わせていただいた。また、編集顧問の顔ぶれを見て、桐朋学園女子高校の生江義男校長(後に理事長)を入れたほうが良いとか、編集委員に安生慶さん(桐朋学園オーケストラ・アドミニストレーター/作曲家)を入れるべきなど、具体的なアドバイスもいただいた。さらに、翌年 2 月の月刊民音に掲載される 3 人の若手指揮者(高関健さん、広上淳一さん、十束尚弘さん)へのコメントもいただいた。

この「齋藤秀雄 音楽と生涯」は、小澤さん、秋山さん、岩城さん、若杉さん、尾高忠明さん、井上道義さん、飯守泰次郎さん、堤剛さん、岩崎洸さん、安田謙一郎さんはじめ 88 名の弟子が世界中から原稿を寄せてくださった。1985 年 4 月 2 日 京王プラザホテルで出版記念パーティーを開催。献杯の音頭は 生江義男校長にお願いし、小澤さ

んにはご挨拶していただいた。

カラヤンの自宅に電話

1987年9月サイトウ・キネン・オーケストラの初めてのヨーロッパ・ツアーフィナル公演の前に、フランクフルトで東京国際指揮者コンクール・ヨーロッパ予選の記者会見を開き、小澤征爾さん、秋山和慶さん、若杉弘さんにお席していただいた。その後、「斎藤秀雄指揮法教程」の英語版出版に際して、序文を書いていただいたことのお礼を申し上げた。推薦のメッセージをカラヤンとバーンスタインから頂こうと、音楽之友社との共同出版にしましたので、私のほうはバーンスタインからメッセージを頂いた。カラヤンには、音楽之友社の担当者がザルツブルク音楽祭に広島のもみじ饅頭をおみやげを持っていったが、なかなか会えません。そんな話を小澤さんにしたらすぐにカラヤンの自宅に電話してくれましたが、残念ながらカラヤンはお昼寝中でその話はそこまでとなってしまいました。

2002年5～7月、生誕100年を記念して民音音楽博物館で「斎藤秀雄生誕100年記念展」を開催。6月小澤さんが見学に来られた時に、斎藤先生の奥さまから寄贈の、先生がご自宅で使用されていたドイツ・ブリュートナー製のピアノ前で、「そうだ、このピアノだ！」と言いながら懐かしそうにされていた。また、斎藤先生の指揮姿を映したビデオの前でドキュメンタリー番組制作のディレクターが「小澤さんにとって、斎藤先生はどんな存在でしたか？」と声をかけると「少し黙っていてよ。今、先生とお会いしてゐるんだから」と静止しました。襟をただす瞬間でした。

コンクールにお祝いメッセージ

2009年、指揮者コンクールは15回目を迎えた。小澤さんには1967年の第1回以来、第8回の1988年まで、21年8回に渡って審査委員を続けていただいた。三軒茶屋の蕎麦屋さんで打ち合わせをした際には、「指揮者コンクールの審査員は、指揮者だけでなく指揮者を起用する人、オーケストラの総支配人とか放送局の音楽局長とかいう人を入れたほうが良い」というアドバイスをいただいた。そして、カナダ・トロント交響楽団の総支配人ウォルター・ホムバーガー氏を推薦していただいた。ホムバーガー氏は、

小澤さんのその時の説明では「チェコのカレル・アンヘルを西側に引っ張りだした人」と説明を受けましたが、小澤さん自身も、ホムバーガー氏からの強い要請でトロント交響楽団の音楽監督に就任したのでした。

それ以降も、小澤さんには組織委員として全体を見通していただいていた。2009年10月のコンクールで、なんとかお祝いメッセージをいただけないか、とマネージャーの平佐さんにお願いしましたが、コンクールが始まってしまい、いよいよ本選を迎えるというタイミングで平佐さんからやっと電話があり、「ウィーンで風邪で一週間寝込んでおり、ようやくフィレンツェに向かう。そのフィレンツェのリハーサル中であれば、リハーサルの前にビデオ撮影に応ずる」との返事だった。早速、撮影班をフィレンツェに派遣して無事撮影。11月3日のコンクール本選終了後のレセプションでの上映に間に合わせることができた。



1967年末ころの『月刊民音』より

課題が多いオーケストラ業界 連盟専務理事を辞して

元日本オーケストラ連盟専務理事 桑原 浩

私がオーケストラの世界に関わるようになったきっかけは、卒業後 8 年間働いていた東京の建設コンサルタント会社退社後、次の職探しという時期にたまたま見つけた広告でした。もともと以前から音楽好きだったので、この世界に入るきっかけになりました。

オーケストラとの最初の関わりは、もちろん聴衆としてです。私が中学生か高校生のとき、知り合いに N 韻の定期会員の人がいて、その人が聴きに行けなくなると巡り巡っていつのまにかチケットが廻ってくる。まだ N 韵が東京文化会館で定期演奏会をやっている最後の頃だったと思います。当時で記憶に残っていて印象深いのは、指揮者ダニエル・バレンボイムが来た頃の定期演奏会。チェリストで婦人のジャクリーヌ・デュプレが来日できなくなった頃ですから 1973 年ごろでしょうか。他にも沢山ありますが、枚挙にいとまがありません。その後 N 韵の定期会員になっていた時期もありました。

大学卒業後、新日本フィルの定期会員になろうと思ったのですが、当時いっぱい定期会員になかなかなれなかつたんです。人間って変なもので、なれないとなると、なりたいんですね。結局、順番待ちして 2 年ぐらいして、定期会員になれました。

小澤指揮ジェシー・ノーマン鮮明に

それでたまたま聴いたのがジェシー・ノーマンの本番です。小澤征爾の指揮で。今でも忘れられない、ものすごい本番でしたから。演奏が終わって、拍手鳴り止まないんですよね。10 分間、15 分間。もちろんアンコールもしたんですけど。お客様が帰るのに苦労した、みんなが異常な雰囲気になった音楽会です。音楽会って、すごいことが起きるんだなって。現在でも、そのときのことは鮮明に覚えています。

あるとき、新日本フィルのプログラムを見ていたら、たまたま「チケット担当者募集」という広告があったので、その時の渋谷にある事務所に電話をし、事務局長だった松原さんと支倉さん、ふたりの面接を受けて新日本フィルの事務局で働くことになりました。

その面接では、あまりに僕が熱心に喋ったらしくて「大丈夫か?」と思ったと支倉さんにあとで言われましたけど、無事に入社です。

それで事務局ではチケットの担当をしばらくやりました。その後、企画の担当になり、事務局長を経て、56 歳まで働きました。

退社後は、ここにいらっしゃる吉井さんに声をかけて頂いて日本オーケストラ連盟に入り、10 年。昨年の 12 月いっぱい退職しました。

企業・自治体たのみから自ら運営

さて、今日は日本のオーケストラの現状みたいな話をしてみたいと思います。

音楽大学を卒業する演奏家も年々増えてくる、ということもあります。オーケストラの数は次第に増えています。また、楽団組織ではありませんが、演奏会毎に編成される一過性のオーケストラもあります。業界では「寄せ集め」と言われています。

日本オーケストラ連盟というのは、我が国のプロ・オーケストラによる組織ですが、そこに加盟するにはいくつかの条件があります。細かいところは省きますが、一番の条件はオーケストラが事務局を持ち、演奏家を抱えていること、そしてその演奏家が他の団体とダブらない、ということでしょうか。同じ演奏家があちこちのオーケストラに所属している状態では、寄せ集めのオーケストラということになってしまいますから。

しかし、優秀で適任な人材というのは少ないものです。特にコンサートマスターについては多くのオーケストラが頭を抱えている問題だと思います。人材不足のためか、どこ のオーケストラも十分なコンサートマスターを擁して活動できていません。年間に百公演を超える数をたった独りで、という訳にはいきません。公演によってはゲスト・コンサートマスターを起用したりして凌いでいるのが現状ではないでしょうか。



我が国のプロ・オーケストラには大きく分けて三つの活動形態があります。

第一は特定企業の資本を中心に支えられている団体。第二は主に地方自治体などに支えられている団体、そして第三はオーケストラが自ら運営し、特定のスポンサーや企業の支援を受けていない団体です。第一のオーケストラはNHK交響楽団、読売日本交響楽団など、経営的に比較的安定している団体です。第二は、札幌交響楽団、東京都交響楽団、京都市交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、仙台フィル、名古屋フィルなど各地の自治体からの支援を受けて組織しているもの。予算は年間五億円から十億円くらいです。金額的な違いはありますが、こちらも経営的にはまだ安定していると言えます。第三は、東京フィル、東京交響楽団、新日本フィル、大阪フィルなど自主的に運営されている組織。実際特定の企業や団体からの大きな援助はありません。私は新日本フィルに長く居ましたから、スポンサーのあるオーケストラはあこがれでした。

若い演奏家たちも経営的に安定したところを目指しています。最終的な目標として。

日本オーケストラ連盟にはこのようなオーケストラを中心に入会員と準会員があります。正会員25団体のうちの九割が演奏家を雇用しています。

コロナ渦の活動に援助

コロナになったとき、オーケストラそれが、それなりの困り方をしました。どの楽団も演奏会そのものが減って資金的に運営が難しいので、何かしらの手を打たなければなりません。当初、国から事業者向けに無利息のローンがありました。中小企業なら問題なく利用ができたものの、まだ、公益法人や財団法人は対象外だったり問題が多く悲惨な状態でしたが、政界やいろいろな方の努力のおかげで徐々に改善されてきました。特に、雇用調整助成金はプロ・オーケストラにとって大きな助けになったと思います。しかし芸術団体でも演劇やその他の組織は当てはまらない。そんな制度を利用できたのはオーケストラだけ、という状況だったのでないでしょうか。

このコロナ渦における支援では、驚くほど多くのお金が集まった話も聞きました。地方のオーケストラでは市民が直接援助してくれたり、「中止になった公演のチケット料金は返さなくて良いです、役立ててください」という人が少なからずいたそうです。

全体としては、大手の銀行や保険会社が日本オーケストラ連盟を窓口にして、億円単位になるほど多額の支援金を提供してくれています。窓口になった日本オーケストラ連盟は、そのお金を加盟団体に分配しました。

また札幌交響楽団ではインターネットの環境を使ったクラウド・ファンディングで多くの支援金を集めたと聞きました。そのほか、いろいろなオーケストラの事務局の方々がTVに出演したり、マスコミにアピールし、オーケストラの窮状を世の中に訴えることで一般に知れて窮地を脱すことができました。芸團協(日本芸能実演家団体協議会)などの協力もありがとうございました。

演奏活動では、東京交響楽団がネット配信をした演奏が評判になり、国も配信を推奨するようになりました。しかし、ネット配信というのは最初は無料で見れるのですが、有料配信になるとやはり続かない。配信の効果と共に難しさを感じました。

それと、コロナ渦で明らかになったのが、それまでは海外からのアーティストに依存していたことがはっきりしました。一方で、来日できない外国のアーティストのかわりに日本人のアーティストが活躍できた、というのもありました。年末の第九も二年間ぐらいいは、ちゃんと出来なかつたですね。しかし、現在では元に戻りつつあります。

定期会員減り聴衆の高齢化

オーケストラの定期会員は、入会するのは簡単ですが、辞めるとなると、そのタイミングが難しいものです。ところが、このコロナ渦の影響か、定期会員が減ったように思います。演奏会が無いなら、これを機に、ということでしょう。そしてこの騒動が終わり、定期会員が戻ってこない状況というのもあります。オーケストラにとって大変な痛手です。

そんな中、集客をなんとかしなくてはならないと、どのオーケストラも試行錯誤を重ねているようです。また、それとは別に、聴衆の高齢化によって夜の公演はなかなか難しくなり、以前は考えられなかった平日のマチネ公演がありがたがれたりしています。

近年の世界のオーケストラの経済的な現状ですが、年間の予算で言うと、N響が30億円レベルですが、アメリカでは100億近く、ヨーロッパでは70億円というレベルです。収入が国、企業、個人からと、国によってさまざまですが、日本のオーケストラというのは、世界の中では決



して多くの予算を有してはいないのです。

ヨーロッパでは国、自治体が支援しているし、アメリカでは企業中心の支援で税制の優遇があったり、個人の寄付で支えられているようです。

多いようで少ない文化庁予算

定期演奏会など公演に対して出る国からの助成金はオーケストラによってまちまちですが、各オーケストラにとつては大変重要で、申請には神経を使っています。つまり國からのお墨付きといいますか、國から認められた団体、というイメージがあるのでしょうか。國としても、演劇や他の芸術団体に比べると音楽というのは分かり易いのでしょうか、多くの助成を受けています。公演毎の支援もありますし、3年間の複数年支援の制度も受けられます。

文化庁予算は年一千億円。多いように見えますが、他の国にくらべれば決して多くはありません。金額も年々少しづつ上がっていますが、新規のオーケストラもどんどん出来てくる、劇団も増える。新規の申請者が増えてくる。全体では決して金額が増えません。

日本のオーケストラは從来から定期演奏会を中心に、芸術性の高い活動を大きな目標のひとつとして運営しているのですが、國や企業から支援を得ようとすると、なかなか、そうとばかりは言ってられない。教育や地域貢献に寄与していかねばならない。ですから根幹にある芸術活動の幹を太くしっかり保つことと幅広い活動をすることは大変力を必要とすることになります。

戦後、オーケストラが様々な苦労を経て一生懸命に維持し、一企業として経済的に維持できるように頑張ってきました。近年ではさまざまな工夫で活動も多岐にわたってきているように感じます。コロナ渦での定期演奏会では多くのオーケストラが舞台上の弦楽器の人数を減らして実施していましたが、大阪フィルだけは16型でこだわってる。私個人としては、「私達はこれでやるんだ」という強い意志が伝わってきて、うれしかったです。

演奏会場は老朽化と人材不足

ホールも大規模改修などの問題を抱えています。各地で民間のホールが老朽化などで次々と閉館していることは不安です。

興行収入を得るために動員のことを考えれば、アリーナのように何千人という集客を見込める施設も、ポップス業

界では大歓迎でしょう。しかし、問題はホールを運営する専門の人材が不足していることです。

照明とか音響のスタッフ、ちょっと前までは日本のスタッフは先進的な技術や設備を使える世界的にも指導的な存在だったのですが、現在では、逆に韓国などに追い抜かれて、日本のスタッフがついでに行けない。こんな時代になってきている、ということがポピュラーの業界では起きているようです。

人材不足というと、オーケストラの事務局も人が集まらない。収入が低い、土日に公演が集中していたり、夜の公演など勤務時間が不安定、休日があるのかないのか、ブラックというイメージを持たれているのか、募集をしても若者が集まらない。ステージマネージャも集まらない、学生アルバイトも集まらない、というような事が起き始めています。

また、演奏会場側でもクラシックの良い企画をする人材も減っています。指定管理者制度が出来ても、実際はどの会場も予算を減らしていて、オーケストラの公演は減少しています。実際、オーケストラの公演は大人数を使うのでお金がかかりますし、地方に赴くとなれば、旅費や宿泊費も必用になり、オーケストラはツアーとして成り立ちにくい。演奏会場とオーケストラを繋いでくれる人材もたりないですね。

求められるネットワークの役割

当然ですが、オーケストラの存在している県は限られています。結果、オーケストラの公演出来るホールやオケのない地方ではコンサートが少ない。奈良、和歌山、岐阜、鳥取、島根、山口、沖縄、少ないですね。

このような地域で、今後どうやって増やしていくか、というのも大きな課題です。オーケストラやマネジメント、それぞれが様々なネットワークを持っている人、つまりは、それをつなぐ役割が求められています。

今まで、社会的な要因も含めて、問題を述べてきましたが、全般的に日本のオーケストラは実力も上がっていしますし、認知度も高くなりつつあります。

これまで日本の中のオーケストラがヨーロッパに行っても、ローカルな都市が多い傾向にありました。ロンドン、ベルリン、パリなどの主要な都市で今以上に活躍できるようになってくると思います。

(2024年2月 東京文化会館会議室 例会にて) 梅津知美記



クラシック音楽文化発展に貢献した平井 滿会員 第34回 日本製鉄音楽賞 特別賞を受賞

数十年にわたり地道に手作りで演奏会制作を続け、商業主義に染まらない市民レベルの視点で、ベテランから若手まで内外の優れた演奏家による室内楽演奏会を企画・運営。室内楽振興に果たしてきた功績が高く評価されました。70歳を超えた今も、年間30公演を超えるコンサートの開催に携わり、室内楽のすそ野を広げています。

【プロフィール】 東洋大学文学部卒業、同大学院修士課程修了（専門は日本近世史）。1975～2010年湘南学園中学高等学校教諭、その後2014年まで講師。この間の1990年鶴沼室内楽愛好会の結成に参加、企画担当、2009年よりは代表として「鶴沼サロンコンサート」の企画・運営に当たり、2010年には会として神奈川地域社会事業賞を受賞した。2022年4月には第400回を迎え、現在では日本を代表するサロンコンサートとして、全国紙やNHKでも紹介されている。その経験を活かし、2008年には横浜楽友会を設立し

2010年より代表、また2011年には海老名楽友協会の設立にも参加するなど、神奈川県内の公共ホールでのコンサートの企画・運営にも当たっており、年間30公演を超えるコンサートの開催に携わっている。著書に「クラシック・コンサートをつくる。つづける。～地域主催者はかく語りき」（2017渡辺和氏との共著、水曜社）、2019年第6回「JASRAC音楽文化賞」受賞。横浜楽友会代表、鶴沼室内楽愛好会代表、海老名楽友協会代表代行、音楽プロデューサー協会幹事。



© 日本製鉄株式会社

音楽プロデューサー協会活動の記録

コロナ感染症の終息により発刊いたしました前号Vol.15から1年、音楽プロデューサー協会はコンスタントに例会も開かれ、有意義な議論が都度展開されてまいりました。そこにクラシック界の巨星“小澤征爾さん”的逝去のニュースがもたら

され、当協会にはまぎれもなく小澤さんと多くの歴史とともにした会員が幾人も在籍することに改めて協会の価値を見出し、ここでの交わされる話は将来の日本のクラシック界に大きな意義あることと感じます。

2023年

- 1月 臨時総会並びに新年会開催。
会則一部改正。
(会場：上野蓬莱閣)
- 3月 当協会の会員、ロングランプランニング株式会社代表、博松大剛氏より同社のチケット販売の取り組みと他社との差別化について話を聞く。
- 4月 コロナ感染症拡大で途絶えていた当協会会報を3年ぶりに発行。
- 7月 総会
- 8月 当協会ホームページを更新
- 10月 「インターネット社会におけるCD（あるいはレコード会社）の意義」について、浅野尚幸氏（ナクソスジャパン）の話を聞く。

- 11月 会員口中氏が事務局長をつとめる『「音」を「楽」しむ ONGAKU の会』の理事長池田邦太郎氏と副理事長斎藤明子氏を招き、音楽を構成する微細な音に注意を払う教育を、身近にある物を使って作り出すワークショップの一部を披露していただく。

2024年

- 2月 元日本オーケストラ連盟専務理事、桑原浩氏により現在の日本のオーケストラ業界を取り巻く現状と問題についてお話しいただく。



いつしょに仕事した
会場こう

会員十七

いっしょに仕事した
会員たち

世界的な小澤征爾指揮者がなくなつた。新聞や雑誌、テレビに計報のあと、小澤指揮者の業績をたたえる評論や記事、番組が報道された。学者、音楽評論家、クラシック担当記者たちによるものだが、小澤指揮者が生前に会つて話した人たちほとんどおらず、本や記事を孫引きしたものだつた。

私たちの協会には、小澤指揮者といつしょに仕事をした音楽プロデューサーやマネージャーがたくさんいる。そこで、小澤さんの人間的なナマの素顔を文章で残せないかと考え、出稿を依頼した。日本で最初に小澤指揮者のマネジメントを担当した梶本音楽事務所、オペラをプロデュースした民主音楽協会の面々らである。

V.S 小澤征爾などの構図もあつた、と伝えられている。そこで、会員の小林信一・合唱音楽振興会理事に、岩城・小澤対比論の寄稿を依頼した。長年にわたり岩城宏之指揮者と親父があり、氏は長野に生家があり松本でのコンサートに毎年行つていたからだ。

だが「体調がすぐれず原稿は無理だと断られてしまった。」
「巷間にわれているような岩城さんと小澤さんの仲が悪かつた、というようなことはなかつた。岩城さんがなくなつたときの朝日新聞をみればわかる。小澤さんが真っ先に岩城さんを悼む一文を載せていた」と電話の向こうで話していた。

（編集子は一九九二年十月に浜離宮朝日ホールが開館したとき、経済記者から初代・支配人に命じられた。演歌と応援歌として）

点ともいいくべき「交響事件」について。さまざまな要因が噴き出した「指揮者拒否事件」だった。ほかに藝大 V.S 桐朋、岩城宏之 V.S 小澤征爾などの構図もあつたと伝えられている。そこで、会員の小林信一・合唱音楽振興会理事に、岩城・小澤対比論の寄稿を依頼した。長年にわたり岩城宏之指揮者と親交があり、氏は長野に生家があり松本でのコンサートに毎年行っていたからだ。

だが「体調がすぐれず原稿は無理だ」と断られてしまった。「巷間いわれているような岩城さんと小澤さんの仲が悪かった、というようなことはなかった。岩城さんがなくなつたときの朝日新聞をみればわかる。小澤さんが真っ先に岩城さんを悼む一文を載せていた」と電話の向こうで話していた

編集子は一九九二年十月に浜離宮朝日ホールが開館したとき、経済記者から初代・支配人に命じられた。演歌と応援歌しか知らない私に、岩城さんが「音

岩城さんのオーケストラ・アソシエブル金沢東京公演は、二泊三日になり旅費がかかる。そこで同じころ開館した名古屋のモーツアルト交響曲六十数曲のコンサートを十年近くかけて公演した。

以来、ベートーベン交響曲全九曲、ブラームス交響曲全四曲、モーツアルト交響曲六十数曲の演奏がいいホールらしい」とたずねてきて天井裏までチェック、「ここで振ろう」ということに。

志村嘉一郎
(ジャーナリスト・元浜離宮朝日ホール有楽町朝日ホール総支配人)

2024年5月 音楽プロデューサー協会発行 編集:志村嘉一郎 デザイン:梅津知美

音楽プロデューサー協会会員

上野喜浩	(公財)群馬交響楽団 音楽主幹
梅津知美	元パルテノン多摩 音楽プロデューサー
江上 裕	(同)エガミ・アートオフィス 代表社員
兼岩好江	(一社)愛知室内オーケストラ 事務局長
口中常嘉	(有)アルシュ(オフィスアルシュ) 代表取締役
	(特)「音」を「楽」しむ ONGAKU の会
榑松大剛	理事・事務局長
	ロングランプランニング(株)
	(カンフェティ) 代表取締役
黒川浩明	(有)大阪アーティスト協会 取締役会長
	(特)関西音楽人クラブ 理事長
小林信一	(一財)合唱音樂振興会 理事
斎藤 茂	OTTAVA(株) 代表取締役社長
佐々木仔利子	(特)日本室内楽アカデミー 理事長
志村嘉一郎	ジャーナリスト、
	元浜離宮朝日ホール有楽町朝日ホール 総支配人
寺田有佑	(株)日本アーティスト 代表取締役
中根俊士	(株)東京アーティスツ 代表取締役
中村由美子	リモージュコンサート(株) 代表取締役
野島友雄	(株)タクトミュージック 代表
萩生哲郎	ナクソス・ジャパン(株) デジタルグループ
橋本伸一郎	(株)いちべる 代表取締役
原 浩之	(株)白寿生科学研究所 代表取締役社長
	Hakuju Hall 支配人
平井 満	横浜楽友会/鶴沼室内楽愛好会 代表

松崎三恵子(株) シド音楽企画 代表取締役
松本京子(有) おふいすべガ 取締役
丸田朗(有) マルタミュージックサービス 代表取締役
村上雄一(株) ユーラシック 代表取締役
村田亨(株) テレビマンユニオン エグゼクティヴプロデューサー
藪田益資 クラシック・ニュース プロデューサー
吉井實行(有) シュリック
吉岡志真(株) たつみ 代表取締役

代表幹事	吉岡志真
幹事	梅津知美 中根俊士 中村由美子
	野島友雄 橋本伸一郎 平井満 丸田朗
監査	村上雄一
参与	藪田益資
事務局長	橋本伸一郎
会計	丸田朗

音楽プロデューサー協会
〒165-0033 東京都中野区若宮 2-33-5
TEL : 050-3337-7639 FAX : 03-5373-7760
E-mail : info@ichibell.net (株) いちべる 内